

もう一度「木育」をはじめよう！

KEM工房主宰・木育ファミリー代表 煙山 泰子

<http://www.mokuiku.net/>

■ふり返ると

ここ数年「木育」という言葉が注目されるようになりました。たとえば木製遊具が「木育おもちゃ」「木育遊具」と呼ばれるようになりましたが、その違いをひとことで説明するのは難しいことです。木育はモノそのものよりも、人の関わりかたを見直す取り組みなのです。たぶん『ウッディエイジ』をご覧のかたは、木材や林業関係者が多いでしょうから、タイトルの「もう一度」の方に興味をもたれたかもしれません。

今年の日本は3月の東日本大震災からはじまり、福島原発問題、9月の台風と大雨・・・私たちは、あまりにも大きな自然の力をまのあたりにしました。人間が自然の一部なら、これをどう受け止めるべきなのでしょう？ ニュースで被害の映像を見るたびに、考えています。津波で流された地域の大量のガレキには多くの木材や木質材料が含まれています。東北3県で発生した2300万トンのガレキのうち、7割が木材とのこと。復興に欠かせないガレキ処理と電力不足の解消のため、木質バイオマス発電の可能性は大きいでしょう。また山林での未利用間伐材なども活用すれば、地域の電力を地産地消でまかなうことも可能になるかもしれません。

平成16年9月8日、北海道の森林は台風18号の強風で大きな倒木被害を受け、この時に北海道大学ポプラ並木の51本中27本が倒壊しました。全国から並木の再生を願い義援金の申し出が相次ぎ、これを受け大学側では倒れた2本のポプラを移植し、あらたに若い木を植えるなどして並木再生の試みがなされました。木工関係者は倒壊したポプラ材で家具や生活用品などのクラフト作品を作り展示しました。音楽関係ではチェンバロを作り演奏会を開くなど、ポプラ並木を愛する多くの人によって、さまざまな活動が展開されました。

私自身も自分にできることを考え、寄付への感謝の気持ちをあらわす記念品のデザインをボランティアでやらせていただきました。ポプラの製材と乾燥は林産試験場に協力していただき、製品の加工は（社）オホ

ーツク森林産業振興協会が引き受けてくださいました。第1回の木育推進プロジェクト会議が開かれたのはポプラ並木倒壊のちょうど2日前。この会議の後、メンバーのメーリングリスト間で交わされた意見でも災害被害木の処理のし方が大きく取り上げられました。ふり返ると、ここから私の木育は始まっていたのです。



北大ポプラ並木再生支援記念品
(煙山泰子/デザイン支援)

■木とふれあい、木に学び、木と生きる

木育は平成16年度、北海道と道民による「木育推進プロジェクトチーム」で検討された新しい言葉で、基本理念は以下のように表わされています。

木育とは、子どもをはじめとするすべてのひとが「木とふれあい、木に学び、木と生きる」取り組みです。それは子どもの頃から木を身近に使っていくことを通じて、人と、木や森との関わりを主体的に考えられる豊かな心を育むことです。

私たちのまわりでは、1枚の紙から家具や建物にいたるまで木から生まれたものがたくさん使われています。でも材料となった木が生きてきた森を想像できる人は、どれだけいるのでしょうか？ 日本は「木の国」と呼ばれ、私たち日本人は古来より最も身近な素材として木と永くつき合い、それが木の文化として受け継がれてきました。「適材適所」の意味が表わすように、身近な生活の中でそれぞれの木材の特性を活かして使う知恵と技術がありました。永い時間をかけて木とともに生きる暮らしは、森林資源の保全と活用のバランスがとれた美しい森を育むとともに、森の恵みに感謝して生きる日本人の心も育んできたのです。

■木育は「つながり」のキーワード

植物としての木の寿命は長いものでは2000年以上。私たち人間の何倍も何十倍も生き、木が伐られてからも同じくらいの時間を木材として生きることができます。

木は最初、樹木として森の中で生き、二度目は人と共に生きるのです。このように森に生きる樹木（みどりの木）と日常に根ざす木材（ちゃいろの木）、もともとはひとつの木でありながら、人の営みや見方がどちらかに偏ってしまうとその「つながり」が見えなくなってしまいます。森林と木材はメビウスの輪のように、表裏一体の関係なのです。利便性や経済効果のみを追求してきた結果、今の社会はこのバランスが崩れ、自然や生活の環境に大きな問題をかかえています。それは人と人、人と自然、モノと自然のつながりを希薄にしました。木育は身近な木や森を通して、私たち人間も自然の一部であり多くの生命と共存しながら生きていることを実感する「つながり」のキーワードとなります。

■手の中に森を感じ、木と語りあう

木育を伝えるときに、大切にしているのは五感で木を感じてもらうことです。たとえば十種類の道産材で作った木のタマゴは、それぞれの木の色や、重さ、木目の違いを知ってもらうための木材見本として作ったもの。生き物の生命を感じさせる木のタマゴから、それを生んだ一本の木へ、そして森へと想いをつなぐ「手のなかの森」を感じてもらいたいと思ってデザインしました。「ナラは、硬くて強いどんぐりの樹。クルミは渋い風合いで、実はリスの食料。イチイはオンコとも呼ばれ、オレンジ色の優しい手触りです」などと説明すると、だれもが触れてくれます。なんと！毎晩抱いて寝る子もいるとのこと。

「この木たちは、どこの森で、どんな時間を過ごして育ったのだろう？」と想像すれば、手にしたタマゴ



森の鳥達からの贈りもの
(道産材のタマゴ)

から故郷の森に出会うことができます。森を歩いてみましょう。大きな木の下に立ち、空を見上げてください。木の幹に触れ、その下を流れる樹液を想像し、

風にゆれる枝先と同じくらい地中深くまで伸びる根の力強さを感じてください。

木とふれあい、五感で感じる事が木育のスタートライン。生まれたての赤ちゃんでも、お腹の中からでも木の音は聞くことができます。木の道具を使うことや生活空間に木を増やすこと、木や森と積極的に関わることで人と楽しさを共感できれば、「木が好き。木と仲良くしたい」という気持ちが素直に芽生えるでしょう。身近な森に接し素敵な時間をだれかと共有することは、自然への興味を促し学びにつながります。木や森を家族や友達や恋人のように思える心は地域や社会、産業にもつながります。

■人の心に木を植える

木育に決まったスタイルはありません。それぞれの地域の森林や木材を使って、こどもからお年寄りまでそれぞれが「楽しい。うれしい」と素直に感じられる木育をはじめましょう。それは間接的ですが確実にゆっくりと、木材需要の促進、森林環境の保全、循環型社会の実現などの具体的な目標へ近づいて行くはずで

す。木がゆっくりと時間をかけて育ち、いつかは大樹になるように・・・ひとりひとりの心に芽ばえた木育の種が木に育ち、人がつながれば心の森が大きく広がります。それが緑の森とつながる時、地球は生命の輝きと美しさで満ちるでしょう。私たちが目指す未来は、すべての生き物が共生して生きる持続可能な社会です。100年先を見据えて森林づくりをすすめるように、一人一人の心の中に木を植えて育てる「木育」にも長期的な視点が欠かせません。

毎日使う木の道具や家具をじっくり選んだり、自分で作ったりすることは、それを使う時の楽しみも大きくしてくれます。自然のなかで木は人に何も求めず、いつも私たちに恩恵を与えながら、穏やかな時間のなかで生きています。ですから木で作られたモノは、木が時間をかけてゆっくり成長したように、ゆっくり使っていきたいものです。何世代にもわたって使い続けられてきた木の道具が語る言葉は、人の心に穏やかに届くでしょう。そして、その言葉に共感する人達みんなが木や森や地球のことを話し合えるようになれば、すばらしいと思っています。

■木に育てられて

学生時代に自分でデザインしたパズルを作るため

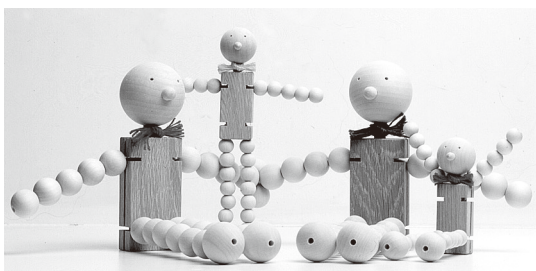
に、カンナで板を削ったことが木と出会うきっかけとなりました。「木とは相性が良いな。木が好きだな」と、その時に感じました。自分の手で作ることは楽しく、出来上がったもので喜んでくれる人がいることは素敵なことです。

これからのデザインには年齢や障害などのバリアを越え、人に喜びや楽しさをもたらすことが求められるでしょう。私は木エディターとして木の遊具や生活用品を作ることや、図書館、幼稚園など子供たちが過ごす空間に木を使うことで多くの人に木の魅力を伝えたいと思っています。このような活動のなかで、なによりも私自身が木から多くのことを学び、今の自分は木に育てられてきたのだと感じています。

■木育をすすめる人づくり「木育マイスター」

私のデザインした製品に「タマコロ・ファミリー」という木の人形があります。ゴムひもでつながった木玉の手足が、胴体の切込みにあわせて動くので、いろいろなポーズが作れます。玉と玉をからめて、つなぐこともできるので「ごっこ遊び」の人気者です。このタマコロたちが、森の中で楽しそうにしている様子を想像してください。森に住む動物や植物と共存して暮らす豊かなイメージが広がって行きます。それは木の人形の世界だけにとどまらず、家族や友達との関係や身近な自然への関心にもつながると思います。

木育が生まれてから6年が経ち、全国でもさまざまな木育の取り組みがなされています。行政がルールを引いたイベント活動が注目されやすいのですが、木育についてはその場限りのイベントよりも木育をすすめる人づくりに力を注いでいただきたいのです。昨年度から北海道では木育活動の企画立案、指導などができる人材として「木育マイスター」を育成する研修がはじまりました。研修内容のすべてを修了すると、木育マイスターとして北海道に認定・登録されます。木育のように大きな概念にもとづく活動の内容は、それを行う人の資質とヤル気で大きく変わります。



タマコロ・ファミリー

木育マイスターが誇りをもって、それぞれの得意分野を活かしながら個性豊かな木育活動の地域のリーダーとして育って行くことを願っています。そのためにも「自分一人じゃない。木育マイスターの仲間がいる」と感じられるネットワークづくりが欠かせません。

■新しい木育活動「グリーンウッドワーク」

昨年2月、名古屋の雑木林研究会という民間団体に講師として招かれ、木育を紹介する機会に恵まれました。その時に出会ったのが「グリーンウッドワーク」です。伐ったばかりの生の木（生木）を材料に、人力の道具を使って生活用品や家具をつくる木工です。生木のことを英語でグリーンウッドと言うので、この木工はグリーンウッドワークと呼ばれています。

岐阜からの講師として同席したのがNPO法人グリーンウッドワーク協会顧問の久津輪 雅さんでした。休憩時間に参加者を対象に、人力ろくろを使って生木を削る実演をしていた時のことです。「煙山さんも、やってみませんか？」と声をかけてくださいました。

「楽しそうだな～」と思いながらも少し控え目にしていました。グリーンウッドワークろくろは、足踏み式ミシンのようにペダルを踏むと木材が回転します。そこに刃物を押しあてると、木の表面がスルスルと削れていきます。「チョットと硬い、大根みたい！生木は、緑の植物なんだ」と、感動しました。自分の力で木を伐り、それを自分の手で加工して道具を作り、それを使う行為は大昔から人がやってきたモノづくりの原点です。「北海道の木でやれたら、素敵だな」と思いました。それ以来、グリーンウッドワークは私の頭のなかをグルグル回っています。北海道各地の木育マイスターが新しく取り組む活動として、大きな可能性を感じています。

グリーンウッドワークについては、久津輪さんが書かれたものを読んでいただくほうが良く伝わりますので以下に紹介します。

— 木工と言えば、機械や電動工具を使い、きちんと乾燥させた材を用いるのが常識なので、なぜ人力？なぜ生木？と思われる方もたくさんいらっしゃるでしょう。しかし、木工がいまの姿になったのはつい最近のこと。19世紀の終わり頃まで、日本では木地師と呼ばれる人たちが人力のろくろを持って山から山へと渡り歩き、伐り倒したばかりの生木を削ってお椀をつくっていました。西洋でも、森の中で足踏みろくろで

生木を挽いて丸棒をつくり、それらを組み立てて椅子にしていたのです。人力で木を加工するなら、やわらかい生木のほうがずっと楽です。そして生木は乾くと縮むという欠点も逆に利用して、乾くほど接合部分を締め付け、強くなるように工夫されているのです。

私はイギリスでこの木工と出会いました。当然、産業としての役割は終えていましたが、環境に優しい「グリーンな」木工として、見直されていたのです。私も、これは一般の人たちの趣味のものづくりや子どもたちへの木育活動など、木の良さ、ものづくりの楽しさを知ってもらうには最適の技術だと思いました。間伐材や里山の手入れで出た小径木など、どんな木も材料になる、刃物が高速で回らないから危なくない、エネルギーを使わないのでどこでもできるなど、今の時代に合うさまざまなメリットがあるのです。

<NPO法人グリーンウッドワーク協会顧問 久津輪 雅さん>

■もう一度「木育」をはじめよう！

森林には 経済財、環境財、文化財として三つの価値があります。これらの価値はどれも欠けるところなく総合的であるほど、それぞれの価値も高まります。近年、その環境財としての価値が社会に認識され、地球環境を守るためには森林の保護が不可欠であるとの意識が浸透してきました。森林を経済財として循環させる仕組み「木を伐って、木材として使い、苗木を植え育てる」と環境とのつながりを見直し、人がどのように生きるべきなのかを社会全体で考えなければならない時が来ていると思います。

東日本大震災にはじまり大雨や台風、そして原子力をはじめとするエネルギー問題などに直面して、だれもが身にしみて感じたことでしょう。「これまで当たり前だと思っていたけれど、今の便利すぎる生活をこのまま続けてはいけない」と。そのためにも、もう一度日本人と木の深い関わりの歴史について学び、その



網走郡津別小学校の木育授業

中から新しい時代の木の価値を見出すことが未来を考
えることにつなが
るでしょう。それが、木育のめざす
「人と木や森との
関わりを主体的に
考えられる豊かな
心」なのです。

私たちの住む北
海道は豊かな自然

に恵まれ、四季の美しい風景の中で暮らすことの喜びを実感できるすばらしい土地です。それぞれの地域の木や森とふれあうことが、未来を生きる人たちにとっても大切な心の養分となることでしょう。

●「木育カフェ」のご案内



木育ファミリー
www.mokuiku.net

木育ファミリーでは、誰でも参加しやすい木育の場として毎回テーマを決めてゲストを招き、木育の体感やトークで会員と一般参加者の交流をはかっています。機会があればぜひ「木育カフェ」に、ご参加ください。

これまでの活動を紹介します。

○「ポプラの響きコンサート&交流会in東裏」

日時：平成22年6月12日（土）

場所：旧東裏小学校（当別）

○「宮大工・北村智則さんのお話を聞く会」

日時：平成22年8月29日（日）

場所：札幌 旧永山武四郎邸2階和室

○「ノルウェーの森林環境教育レポート&ダッチオープンの夕べ」

日時：平成23年1月11日（土）

場所：旭山記念公園・森の家

○「森林ジャーナリスト 田中淳夫さんのお話を聞く会」

日時：平成23年5月10日（火）

場所：北海道大学・遠友学舎

○「木はストロー」

「東日本大震災被災地での活動」

日時：平成23年6月18日（土）

場所：旭山記念公園・森の家

○「復元させた弥生時代の木琴の音色を聴く会」(予定)

日時：平成23年10月29日（土）

場所：北海道大学・学術交流会館第3会議室